

3. 日記・手紙の学習指導

——生徒の実態に即して——

米 山 誠

1. 日記・手紙指導の今日的意義

テレビ・ビデオ等の映像メディアの発達、また電話の普及により、落ちついてものを読み・書き・考えるような態度・習慣は、現代人の日常生活から失われつつある。そして、子どもや若者の読書ざらい、作文ざらいの傾向が進んでいる。このような時勢下で、日記や手紙を書く生徒が減少しているのも当然の事態といえるかもしれない。

次は、日記・手紙に対する中学生・高校生・大学生の実態を知るために試みたアンケートの結果を簡潔にまとめた資料である。

アンケート実施の時期と対象者

- ①1977年3月。名大附中1・2年153名(男76, 女77), 同附高1・2年245名(男121, 女124)。
- ②1981年1月。名大附中3年86名(男41, 女45), 同附高2年120名(男52, 女68), 名大文系3・4年49名(男14, 女35)。
- ③1988年1月。名大附中3年81名(男39, 女42), 同附高3年118名(男58, 女60), 名大文系3・4年41名(男9, 女32)。

A. 「日記を書いているか」について、「書いている」と答えた者。

	1977年	1981年	1988年
中 学	42 (%)	31 (%)	17 (%)
高 校	46	44	18
大 学		44	34

B. 「手紙を書くことは好きか」について、「好き」と答えた者。

	1977年	1981年	1988年
中 学	41 (%)	51 (%)	45 (%)
高 校	35	58	41
大 学		67	65

C. 「電話で話すことは好きか」について、「好き」と答えた者。

	1981年	1988年
中 学	58 (%)	62 (%)
高 校	39	52
大 学		54

D. 「電話と手紙と比べてどちらが相手と気持ちに通じ合えると思うか」について。

		1981年	1988年
中 学	電 話	36 (%)	42 (%)
	手 紙	32	18
	わからない	32	40
高 校	電 話	36 (%)	34 (%)
	手 紙	31	14
	わからない	33	52
大 学	電 話	16 (%)	10 (%)
	手 紙	40	49
	わからない	44	41

日記や手紙が書かれなくなってきたという実態は、簡便さ、効率のよさを求める現代的な生活習慣の反映である。しかし、それは、人間それぞれの主体性や個性の弱体化をも意味しているのではないだろうか。だからこそ、日記・手紙のように日常生活に根ざす文章表現をあらためて重視したいと、私は思う。

指導要領には、中学「国語」の目標は、「自分の考えを大切に正確に話したり文章に書いたりする能力を身につけさせるとともに、進んで表現する態度を育てる」とあり、高校「国語表現」の目標は、「国語によって適切にまた効果的に表現する能力を高め、思考力を伸ばすとともに、進んで表現することによって生活を充実させる態度を育てる」とある。

日記・手紙は、上記の目標に即した指導のために、初歩的、基本的な意義をもち、しかも実用性があり、生徒の表現意欲を喚起するのに有効な文章形態と考えられる。

新聞の投書欄には、言語生活に関する意見が時折掲載される。次は、その一例、「子供たちに日記やはがきを書かせよう」という題の一篇である。

「現在中学校の教師をしてる友の話聞いていたら、今の中学生は作文を書くのがとても苦手だそう。ま

る一時間を作文時間に当て、400字詰め原稿用紙に一枚書くだけなのに、それがなかなか書けないらしい。頭をかかえこんで原稿用紙とにらめっこするだけの子、また書いてもほんの2・3行で終わってしまう子供たちの姿をみていて、どのように指導していいのか困ってしまう、と友は語っていた。

これは日常生活に大いに関係があるだろうし、やはり日々の積み重ねではないかと思う。急に作文を書きなさいと言われても書けるものではない。手紙より電話、書き写すよりコピー、録音といったふうに手間ひまかけることがめっきり少なくなってしまった便利な昨今である。家庭においてもっと子供たちに書く機会を与えたいものである。

毎日、日記がつけられるようになればしめたものだし、離れて住む祖父母や知人などにも、電話でなく、はがき一枚でも書くというふうにもっていききたいものである。「習うより慣れよ」のことわざを生かしていきたいものだ。(42歳、主婦。1986.10.22『朝日新聞、声欄』)。

ここに述べられているように、書くことに親しませ、習慣づけるために、日記・手紙の指導はきわめて適切有効と思われる。家庭教育と連携させ、さらに生涯学習として発展させうる可能性も大きい。日記や手紙の指導は書く技術を教えるというよりも、書く意欲を起こさせ、態度・習慣を養うところに大きな意義があると思われる。作文教育の歴史からみても、いわゆる「読・書・算」における「書」の内容が、書簡文中心であったことも思い合わされるのである。

また私たちは、例えば、啄木・一葉・荷風等の日記や、漱石・子規・鷗外等の書簡を読むとき、人間としての作者自身にじかに触れたような親しみを覚える。「アンネの日記」・「きけわだつみの声」などを読むとき、その一言一句の切実さに胸をしめつけられる。あるいは、「こころ」・「行人」・「友情」・「風立ちぬ」・「若きヴェルテルの悩み」・「チポ一家の人々」・「狭き門」・「狂人日記」等々の日記・書簡の形式を効果的に生かした内外の名作を読むとき、忘れがたい印象を受ける。日記体、書簡体の文章は、現実感をもって読者に迫ってくるのである。このような日記文・手紙文それぞれの魅力や効力を生徒に認識させたいと思う。

2. 日記の学習指導

(1) 日記に関する実態調査

以下は、中学生、高校生に対して行なった日記に関するアンケートの結果である。

・アンケートの対象——名大附中3年81名(男39, 女42), 同附高3年118名(男58, 女60), 名大文系3・

4年41名(男9, 女32)。

・アンケート実施時期——1988年1～2月。

A. 「現在、日記を続けているか」

「書いている」——中学17%(男5, 女29), 高校18%(男13, 女28), 大学34%(男22, 女37)。「書いていない」——中学83%(男95, 女71), 高校82%(男87, 女78), 大学66%(男77, 女62)。

「書いていない」のうち「以前に書いたことがある」は、中学62%, 高校59%, 大学49%であった。こうしてみると、日記の経験者は、中・高・大それぞれ全体の80%に近い。また「今後書いてみたい」は、中学16%, 高校19%, 大学40%であった。

「書いている」のうち、「日記はたのしい」は、中学61%, 高校47%, 大学86%で、男女別にみると、いずれも女子が圧倒的に多かった。

B. 「いつ頃から書き始めたか」

中学——「幼稚園」14%, 「小学校」43%, 「中学」43%。高校——「幼稚園」5%, 「小学校」28%, 「中学」19%, 「高校」48%。大学——「小学校」21%, 「中学」19%, 「高校」19%, 「大学」21%。

C. 「書き始めたきっかけはどんなことか」

中学——「なんとなく書いてみたくなった」, 「友人の影響」, 「先生の指導」等。

高校——「一日一日があつというまに過ぎてしまい、記憶もうすれてしまう。自分は何をやったかという証しを残しておきたかった」, 「若いときのことを書いておかないともったいないような気がして」, 「自分の成長の跡を見たいと思って」, 「なんとなく書きたくなった」, 「さびしかったから」, 「無性に自分の気持ちを書きたくなったから」, 「思ったことをノートの中の自分におっつけて、自分自身をもう一度見直してみようと思った」, 「親身になってくれる本当の友人がいなくて空しくなったとき」, 「文章の練習がしたかった」等。

大学——「中学のとき友人に恵まれた学年で、毎日が余りに楽しくて、それを親や妹に聞かせるだけでは物足りなくてノートをはけ口にした」, 「高校のとき、友人に日記帳をもらって」, 「小学3年のときの交換日記から」, 「高校時代の交換日記を見て、あらためて感動し、自分自身の歴史という意味で書こうと思った」, 「高校のころ、悩むこと、書きたくなることが多かった」等。

D. 「主にどんなことを書くか」

中学——「一日中のできごととそれについて思ったこと」, 「見た映画やテレビのこと」, 「腹の立ったこと」, 「親、先生、友人等のこと」等。

高校——「その日にあったこと、それに対する感想、考え」, 「行動の記録、メモ、その時の気持」, 「悩みや

悲しみ、「人に話したくても話せないようなこと」。「心に残ったこと」「感動したこと」。「ある人に対する思い」、「恋いした子のこと」。「悲しい時やうれしい時の感情」、「自分の生き方、考え方の反省」等。

大学——「その日その日のできごと」、「感想、思考、感情、反省、目標」、「映画、読書、レコード等の感想」、「お金のメモ」、「折々の自分の気持の吐露」、「書き残しておきたいと思ったこと」、「いらいらしているときの心の中」等。

E. 「日記を書くことにどんな意義があると思うか」

中学——「過去をふり返る資料」、「思い出をよみがえらせる」、「あとで読んで、自分の考えの変化がわかる。」等。「文字の練習」、「文章の練習」、「自分は文章がへたなので、日頃のささいなことでも書いてうまくなりしたい。」等。「その日その日の反省」、「書いている間に考えるので、おちついて自分を見直すことができる。」、「いらいらがなくなり気が晴れる。」等。

高校——「生活の記録」、「自分の成長がわかる。」「将来自分の青春を思い出す。」等。「自分を客観的に見ることができる。」、「自分の考えとか自分の性格・人間がわかってくる。」、「悩みごとの整理」、「ストレス解消」等。「小論文の練習」、「文章表現力をつける」「漢字の勉強になる」等。

大学——「人生の記録」、「思い出の資料」、「人は時がたつと多くのことを忘れてしまう。一生をふり返ったとき、自分の生きた明確な足跡として、日記は大きな意義がある。」、「強く感銘をうけたことを書くことが多いので、それがいつも日記帳を開くたびによみ返ってきて感動を新たにす。また、日記を書きながらものを考える。そういうところは、後から読んでもそれなりに真剣で、自分の成長の跡を見る思いがする。」、「文章力をつける」、「表現の工夫」、「文章を書くことに慣れる」、「思考の整理」、「主観的に行動してきた自分を客観的にみることができる。冷静になって反省し、明日の行動の指針とする。」等。

(2) 日記の学習指導

A. 指導目標

① 日常の出来事や感想を自分のことばで自由に書き記す習慣を身につけさせる。

② 事実や感想を簡潔、的確に記録することを心がけさせる。

③ 広く深く物事に関心をもたせ、表現意欲を起こさせる。また、興味深い日記文の例など鑑賞させる。

④ 自分の生活を反省し、充実した生き方を探求するような思索的態度を養う。

⑤ ことばへの関心を深めさせ、表現のたのしさを味わわせる。

B. 指導事例

① 1984年度、高3、「国語表現」(2単位、必修)の年間計画において、年度最初の学習として位置づけ、日記文の鑑賞及び表現指導に4・5月の8時間を当てた。第1時は、原稿用紙の使い方、日記学習の意義などについて説明の後、「1984年4月9日(始業式当日)のこと」という題で日記形式の作文を行なった。(600~700字、30分)。第2~6時は、すぐれた日記文の鑑賞、「敗戦日記」(高見順)、「塵の中」、「水の上の日記」(樋口一葉)、「青春日記」(大宅壮一)、「本隊の最後」(R. スコット)を教材として扱ったが、読解に傾きがちで、表現学習としての効果をあげられなかったことが反省させられる。第7・8時は、第1時に生徒の書いた日記文のうち模範例を紹介し、添削と批評を加えた全員の分を個別に説明しながら返却した。^(注1)

次は、第1時に書いた生徒の日記文の一例である。

1984年4月9日(始業式当日のこと)

高3A 西村美由希

今日は始業式だった。クラスはA組になった。久々に皆と顔を合わせて、「キャー、いっしょのクラス? ヤッター!」と喜んだ。同じクラスには、りっちゃん、カッコ、ナミちゃん、トモなどがいて、けっこう楽しいクラスみたい。残念ながら、せわしいユミちゃんとはちがうクラスだったけど、選択の授業で一緒だからいいや。

始業式の前に離任式と新任式があったから、それだけで、もう疲れちゃって。その後、引き続き始業式だもん、たまったもんじゃなかった。ホームルームはみんなにぎやかで、先生のことばがよく聞こえなかったほどだ。本当にうちのクラスの男子ってにぎやかだなあ。LTの後、みんなで春休みのお土産交換をやった。明日からは「授業」、がんばるぞ。

② 1988年4月、中1及び高1の国語で、本年度最初の作文として、入学式当日のこと、又は、入学後の生活・心境について、日記文または手紙文の形式で書かせた。中1、高1とも、日記文の者が約3分の2であった。

日記文を書く態度、作品の出来について、高1、中1を比較してみると、中1の方が抵抗なく、素直に執筆し、表現もいきいきしているように感じられる。

次は、中1の日記文の一例である。

1988年4月7日(入学式の日)のこと

中1A 中出衣美

入学式の前、だれも知り合いのいない中学に入るなんて心配だな、などと思っていた。とうとう今日は入学式。朝からお母さんが制服のスカートやブラウスに

アイロンをかけたり、ほこりをとったりしてくれていた。私はお母さんのその姿をみたら、いよいよだと思ひ、緊張した。朝食を食べ、少したってから入学式の用意をしはじめた。制服を着終った自分を鏡で見ると、自分が少し大人になったようなよい気分だった。

入学式が行われる講堂で新しい仲間になるみんなと会った。私は1年A組だった。「A」という字は前から好だったのでよかった、と思った。

③1977年3月、中1の春休みの宿題として、数日分の日記を書かせたことがあった。次に、当時の日記文の一例(紙面の都合上、一部省略)を記してみたい。

春休みの日記

中1 山田賢一

・3月31日 雨のち晴

3月もきょうで終り。休みもあとわずかとなった。1年生の復習も大事だと思うが、なぜか2年生の新しい教科書の方に目うつりしてしまう。数字の問題を、簡単だ、こんなのノと思ひ、調子にのって解いてみたが、答え合わせしてみると、○少く、×たくさん。息抜きに外を見ると、ぼくのノートと同じようにゆううつな天気だった。

今日、父の入院する日がきまった。大した病気ではないが、手術すると一ヵ月かかるそうだ。その上どんな手術よりも痛いそうだ。そんなに心配したことはない、と父は言っている。父は手術のことより、家のことが心配だという。いつもは絶対弱音をはかない父なので手術がこわいなどと死んでも口には出さないだろう。でも、いざそのときになれば家のことなんか忘れてしまうにちがいない。人間って弱いものなんだから。

(4月1日、2日の分省略)

・4月3日

父はもう荷づくりをはじめた。入院まであと2日、母は父のためにお茶断ちをすとか、なんとか言っているが、これから先のことはどうなるかわからない。祖母は父につきっきりのもりだと言っている。

病院のごはんは、あきがくるといけないので、こんなときは手づくりのおかずを持って行ってやりたい。

あしたは、ぼくが手つだいをしなければならぬんだ。弟は入学式で母といっしょに行くし、姉は、学校の出校日なのだ。

・4月4日

ぼくは、「あしただ、あしただ」と心があせってくるような気がした。明日から、一ヵ月父の顔が見えない。父の代わりに、母がいつもの倍、仕事をしなければならぬ。ぼくも、母みたいな努力家になりたい。

母の話だと、母は小さい時に、父と兄二人を失くしているし、戦争にもあっている。そのころは家がびんぼうで内職を終えてから夜中に勉強したそうだ。

母もがんばらなければならないが、ぼくたち3人兄弟と、やっぱり父自身も手術のつらさに耐えなければならないと思う。父の顔色が一日一日変わっていくような気がする。父は今ごろになって栄養をつけなくてはと言っている。

・4月5日

弟は遊びに出かけた。姉はまだ帰ってこない。ぼくは、ぼんやりとねころがって高校野球を見ていた。きょう父は入院、そして手術。

姉は言っていた。「ごはんがあまりのどを通らないわ」。いつも強気の姉としてはめずらしいなと思った。弟も帰ってきて昼食を食べだしたが、弟は無関心で、いそいで食べていた。あーっと思ったら弟の姿は見えない。いつも「ドン」の弟にしてはめずらしいことだった。

5時ごろ、父のそばにいたおじいさんから、無事すんだ、と連絡があり、ぼくはほっとした。母も姉も弟もみんなよろこんでいるように見えた。あとは退院まで待つだけさ、と気が楽になった。

3. 手紙の学習指導

(1) 手紙に関する実態調査

以下は、手紙に関するアンケートの結果であり、前記の日記に関するものと同種の資料である。

・アンケートの対象——名大附中3年81名(男39, 女42), 同附高3年118名(男58, 女60), 名大文系3・4年41名(男9, 女32)。

・アンケート実施時期——1988年1～2月

A. 「手紙(封書, はがきとも)は1ヶ月平均、何通ほど書くか。」

ア. 0通——中学40%(男67, 女64), 高校45%(男72, 女18), 大学25%(男56, 女16)。

イ. 1～5通——中学46%(男26, 女64), 高校52%(男26, 女77), 大学73%(男44, 女81)。

ウ. 6通以上——中学13%(男8, 女21), 高校4%(男1, 女3), 大学2%(男0, 女2)。

B. 「年賀状は何通ほど書いたか。」

ア. 0通 ——中学4%, 高校14%, 大学7%

イ. 1～10通 —— 〃 10%, 〃 29%, 〃 20%

ウ. 11～20通 —— 〃 21%, 〃 20%, 〃 17%

エ. 21～30通 —— 〃 30%, 〃 15%, 〃 20%

オ. 31通以上 —— 〃 35%, 〃 22%, 〃 36%

C.「手紙を書くことは好きか。」 (％)

	中学		高校		大学	
	男	女	男	女	男	女
大好き	0	26	4	8	22	19
かなり好き	11	50	14	56	11	56
余り好きではない	66	22	56	27	67	25
全く好きではない	21	2	23	7	0	0
どちらともいえない	2	0	3	2	0	0

全体的にみると、「好き」は、中学45％、高校41％、大学66％、「好きではない」は、中学54％、高校56％、大学34％となる。なお、全体の男女別では、「好き」は、女子約70％以上、「好きでない」は、男子約70％以上で、大きな差のあることがわかる。

〈好きな理由〉

中学——「相手の返事がたのしみ」、「口で言えないことも書ける」、「素直に心を伝えられる」、「友人との情報交換」、「普通の文章より親しみやすく書ける」等。

高校——「遠くの友人との交信」、「電話とちがってゆっくり考え、ことばを選んで書ける」等。

大学——「自分の気持ちがじっくり書ける」、「日記もよいが、相手のある文章が書きたい」、「文章を書くことが好きだし、人とのつながりを確かに行うことができると思う」、「口では説明できないことも筋を通して相手に伝えられるし、読み直しができる」等。

〈嫌いな理由〉

中学——「めんどくさい」、「時間がかかる」、「うまく書けない」、「字がへた」等。

高校——「めんどくさい」、「書き出すまでがおっくう」、「文章が苦手、特に形式があるのでいやだ」、「用事があれば電話でことが足りる」、「切手を買うのがめんどくさい」等。

大学——「字がへた」、「文面の形式を整えるのに苦労する」、「文章がまとまらない」等。

D.「手紙をもらって感動したことがあるか。」

「ある」——中学42％(男22, 女61), 高校56％(男40, 女72), 大学73％(男67, 女75)。

〈どんな手紙をもらったときか〉

中学——「つらい目にあっているときのアドバイスや激励」、「親切なあたたかい手紙」、「うれしい内容のとき」、「外国からの手紙」、「なつかしい人からもらったとき」、「好きな人に出して返事がきたとき」等。

高校——「めったに会わない人からの手紙」、「好きな人からの手紙」、「おちこんでいるときの激励」、「ラブレター」、「外国へ行った友人や外国人からの手紙」、「恩師からの励まし」等。

大学——「励ましの手紙」、「音信不通だった人から

の突然の手紙」、「友人が悩みをうちあけてくれたとき」、「相手が自分の問いかけに真剣に答えてくれたとき」、「相手の本音が書いてある手紙」、「簡潔な中に気持ちが伝わってくる時」、「旅先の友人からの絵はがき」、「先生から返事をもらったときで、その内容から自分の意見や言動が理解されていると思われたとき」、「小学時代の先生からアドバイスをうけたとき」、「恋文」等。

E.「手紙を書くとき困難を感じるか」

「感じる」——中学11％、高校19％、大学31％。

「感じない」——中学77％、高校69％、大学69％。

「わからない」——中学12％、高校12％、大学0％。

〈どんなことに困るのか〉

中学——「文字がへただから」、「文法や漢字の誤りが気になる」、「同じ語をくり返したり漢字を調べたり適切な語に迷ったりすることが多い」、「書き始めのことばに苦労する」、「内容があいまいになる」等。

高校——「何を書けばよいのかわからない」、「気持ちがあまく伝えられない」、「字がへただから」、「文章の構成、まとめ方」、「時間がかかる」、「敬語」、「相手はどう思うか気にかかる」等。

大学——「字がへた」、「ことばづかい」、「内容がない」、「簡潔なまとめ方」、「書き出し、時候の挨拶」、「敬語、作法」、「下書き、切手、封筒などが面倒だ」、「相手に失礼にならないかと神経質になりすぎる」、「手紙をもらって、返事を書くのが苦痛。書く内容を見つけるのに困る。返事が遅くなると失礼だと思ひ、せきたてられるような苦痛を感じる。」等。

F.「手紙の形式、作法について知っているか」

「よく知っている」——中学1％、高校1％、大学5％

「一応知っている」—— 〃 30％、 〃 44％、 〃 35％

「余り知らない」—— 〃 51％、 〃 40％、 〃 48％

「ほとんど知らない」—— 〃 18％、 〃 15％、 〃 12％

〈手紙の形式、作法はどこで知ったか〉

中学——①学校、②家庭、③書物。

高校——①書物、②学校、③家庭。

大学——①書物、②家庭、③学校。

(2) 手紙の学習指導

A. 指導目標

①社会生活における手紙の意義・価値を認識させる。

②手紙文の形式や心得の基本を理解させる。

③真情をこめて書くことを第一に心がけさせる。

④目的や相手に合わせ、簡潔、平明に表現することを心がけさせる。

⑤実生活の中で手紙を書く態度や習慣を身につけさせる。

⑥すぐれた手紙文の例を鑑賞させ、手紙への親しみ

を深めさせる。

⑦文章表現への抵抗を失くさせ、意欲や自信をもたせる。

B. 指導事例

本校では1984年度以来、高3「国語表現」の年間計画において小論文、要約文、日記文、手紙文、スピーチ、記録文、感想文等を指導しているが、それらの中で、例年生徒が大きな興味・関心を示し、最も多数の生徒から「有意義だった」と評価されているのは、手紙文とスピーチである。^(注2) そのような実践の経験を踏まえて、1987年度も手紙を重視し、9月から10月にかけて、下記の指導に6時間を当てた。

①手紙文教材の鑑賞(三浦哲郎、夏目漱石、正岡子規、有島武郎等の手紙文を教材として使用)。

②手紙文の書き方の説明(手紙の形式や書き方についての諸資料、過年度の生徒手紙文数編を使用)。

③「国語表現」担当教師宛に近況及び、現在の心境、将来への思い、等を知らせる手紙の執筆、提出(形式は縦書きの標準的な便箋で3枚以上、縦長の標準封筒使用)。

④生徒の手紙文に対する添削、評価。後に簡潔な返信を添えて各自に返却。

C. 生徒の手紙例(男女各1編)

拝啓 文化祭も終わり、いよいよ秋らしくなってきましたが、先生にはいかがお過ごしですか。私の方は忙しくもありましたが、充実していた文化委員会の活動も終わってしまい、今は心にぽっかりと穴があいてしまったような気分です。その上、ひいきの阪神タイガースが最下位ということで、もう心の隙間から冬の風が吹いているような感じです。今年の冬は寒いそうですから、本当の冬が来るまでに、この心の隙間をふさごうと、やっと勉強にエンジンをかけはじめたところでもあります。そろそろ生涯の仕事を見据えつつ、卒業後の進路を決めなくてはなりません。

私は教師をめざすことに決めました。これまで約十二年間、多くの先生に出会って、その先生たちを見ると、教師という職業は本当に大変な仕事だなあ、と思います。授業をすることだけが仕事ではないことが、実感としてよくわかるように最近なったからです。小学校五・六年生の時二年間連続で担任だった先生には様々なことを教えていただきました。当時の私は、今とは比べものにならないほど悪い奴でした。自己中心的で、先生を困らせてばかりいました。そんな私に先生は、次の言葉をテープレコーダーのようにしてしつこく言い続けました。「人の物に傷つけない、人の心に傷つけない……。」と。なかなか味のある、奥深い意味をもった言葉のように思います。しかし、当時の私には奥に隠れたこの言葉の真の意味を理解するこ

とができませんでした。毎日、耳にタコができるくらいに言われ続けた、この言葉を卒業してから何回も何回も唱えてみて、高校に入って初めてわかってきたのです。

今考えてみると、小学生の悪がきに先生は、この一言で実に多くのことを教えて下さろうとしていたわけです。あの時、先生が植えてくれた種が今頃になってやっと芽生えたわけです。教師というのは地味ではあるけれどもすばらしい仕事です。この先生の言葉の影響で私は教師の道に進もうと決めたと言えるのです。この先生は現在、三重県名張市内の小学校に勤めておられます。

あと何ヶ月か高校生活が残っております。いろいろとご指導をよろしくお願いします。

時節がら、お体に十分ご留意なさってください。

敬具

九月三十日

伊藤修史

米山誠先生

拝啓

教室の窓から吹いてくる風が冬服の身にも心地よい季節となりましたがいかがお過ごしでしょうか。

さて、こうして私がお手紙を書いたのは、先生にいろいろと聞いていただきたかったからです。

私は今、高校最後の文化祭も終わってしまい、なんだか寂しい気がしています。最近では、毎日のように進路指導室へ通う人が多くなりました。もう大学受験が近づいたのですね。

以前はずっとこのままでいたいと思っていましたが、今ではもう、この学校の小さな集団の中で満足してはいけないうようになったのです。はやく大学へ行き、やりたいことをやりたいのです。

去年の今頃はまだ、どの大学へ行こうか、どの学部へ行こうか、本当は自分は何がやりたいのか、悩んでいました。やはり大学の名前も気にしました。が、自分のやりたいことがわかり、その目標に向かってがんばっていくことにした今、そんなことにこだわった自分はずかしく思います。

私の目標、それは大学へ行き、医学の勉強をすることです。私にとって医学の道は険しいかもしれませんが、最初から無理だと決めつけず、自分の可能性を追求することにしました。

女性も自立する時代です。この世の中で、私は生きがいをもって生きたいのです。卒業して、結婚して、家庭に入り、子供を産み育て、子供を生きがいにするのもいいかもしれませんが、私は、自分の手で何かをしたいのです。現在、十八年間私を育ててくれた父も

母も元気ですが、いつ事故にあったり病気になったりするかわかりません。何年か後には確実に高齢化社会の仲間入りをするのです。そんな時、何かしてあげることができればと思います、そのために私は医学を選びました。

ここまでたどりつくのに、どれだけの時間を費したかわかりません。どこでもいいから短大に入って、さっさとお嫁に行こうか、語学の方面に進んで、国際的のいろいろの人との輪を広げていこうか、また留学しようか、と考えたこともあります。女の子なので六年間も大学へ行っていたら結婚できなくなるのでは、と一晚中考えこんだこともあります。今は、堂々と胸をはって生きていくために私に合う方向が見つかってよかったと思っています。

先生は、高校三年生のこの時期、どんな考え方をしてみえましたか。もし、よろしかったらお聞かせいただきたいと思います。

これからもお世話をおかけしますが、よろしく願います。

かしこ

九月三十日

中村有里

米山 誠先生

手紙は、下書き、推敲、清書という過程で、3時間の計画で書かせた。3時間の授業で完成できず、家庭で書き上げてきた者もあり、また、完成できなかった者もいた。結局、未提出者はクラスの約1割であった。

生徒の手紙文全体を通して目立っていたことは、形式の不備、特に、後付けの日付、宛名、発信者名が落ちていたり、まちがっていたりする者が多く、約40%に上った。次に目立ったとは、敬語の不適切な使用と漢字の誤字が多いことであった。しかし、内容的には真情のこもったものが多かったと言ってもよい。

D. 手紙の学習に対する生徒の声

学年末、高3「国語表現」の学習を終了した後、一年間を通しての自由な感想、意見を全員に書かせた。様々の感想の中で、1987年度もやはり、スピーチと手紙に関するものが多く、貴重な学習体験だった、という感想が目立った。次に、手紙文についての代表的な感想を幾つか抜き出してみよう。

○「手紙というものはつくづく便利なものだと思う。電話とちがって、相手に失礼のないようにあれこれと考える余裕があるからだ。普通に話しているのとちがって残るものだから、年上の人に書く場合は特に、無礼なことを書かないように気を使う。また規則というものがある。授業で習ったが、冒頭には「拝啓」と書き、季節などのあいさつから本題に入り、「敬具、

でしめくくる。若い私たちは、このことを殆ど知らなかったと思う。最近縦書きは減多に見られず、横書きばかりだ。色ペンを使い、表現の仕方もまるで話すような調子である。だから急に目上の人に手紙を書けと言われ、苦勞して書いたものはどこか不自然であるにちがいない。このまま大人になって、下手なままだともっと恥ずかしい思いをするだろう。気をつけなければいけないと思う。」(高3A女子)。

○「私は手紙をめったに書かない。今度書いたのは二年ぶりくらいだったと思う。長い間書いていないと本当に書けなくなるなあと痛感した。書き出しからつまってしまうのだ。時候のあいさつなんて全然書けなかった。二年前に辞書とか調べて必死にお礼状の手紙を書いた覚えがあるが、その時調べた時候の言葉、結びの言葉などみんな忘れていた。もし表現の授業で手紙を書かなかったら、一生手紙を書けなかったかもしれない。」(高3A女子)。

○「手紙は、形式にとらわれないで自由に書きたかった。型にはまると、書きたいことが書きにくくなってしまう。季節のあいさつに苦勞した。だけど、先生から返事をもらったとき、すごうれしかった。もっとたくさん書いてほしいと思った。」(高3A男子)。

○「1学期のスピーチ、2学期の手紙はとてもよかったと思います。日頃人前で話したり、きちんとした手紙を書いたりしたことがなかったので、今回苦勞したことは今後必ず役立つと思います。」(高3A男子)。

4. 今後の課題——自己表現の指導——

以上、生徒の文章をなるべく多くとりあげながら、日記・手紙に関する生徒の実態、学習指導の事例などについて述べた。日記・手紙は、書き手の生活、性格、思想、感情等を直接反映する自己表現の文章形態であり、作文教育の基礎である、といえるのではないだろうか。

生徒の主体性・個性を重視する教育において、自己表現に対する生徒各自の関心・意欲を高めることは不可欠の課題であり、日記・手紙の指導を積極的に進めることの意義を強調せずにおられない。それは、単に学校教育においてというよりも、それぞれの人間にとって生涯学習の課題であり、家庭教育の課題でもあるといえよう。日記・手紙の指導は、生徒の人間形成に大きく係わる指導なのである。

次に、心の支えとしての日記や手紙について述べた本校生徒の文章2編を示して、この稿をしめくくることにしたい。

日記と私

新谷立佳子

夜中、ラジオをききながら机に向かう。そして机の奥の方から日記帳をとりだすと、私の一番心の安らぐ時間が始まる。日記を目の前にして、私の頭の中には一日の出来事がそのまま映し出される。そして私は一日のうちの一部を日記に書きとめるのだ。

私が日記を書き始めたのはいつ頃だったろう。たしか小学校3年生くらいの時、父に書きなさいと言われてるのが一番初め。その時の日記はもうどこかへ行ってしまったが、いつも一言しか書いていなかったことを覚えている。「今日はたのしかった。」「つまらなかった。」など。

私が自分の意志で日記をつけ始めたのは中学3年生の時だ。中3のとき、いろいろなことがいっぺんに起こり、頭の中がごちゃごちゃになると、日記に書き留めながら心の中を整理した。

そして今、私にとって日記とは何だろう。そのことを考えると、いつも、「アンネの日記」が心に浮かぶ。アンネにとってそうであったように、私にとっても私の日記は心の支えであり、一番の友だちだ。ありのままの私の気持ちを書き留めることのできる相手であり、私が何を書こうと、いつもそのまま受けとめてくれる。

日記を読み返すと、まるで「私の歴史」を読んでいるような気がする。今はまだすごく浅い歴史だが、いつまでも日記を書きつづけ、私の人生を書き留めていきたい。(1980年度、高2)。

私と友達——手紙を通して—— 水野奈美

私がたくさんの手紙を出すようになってから、はや五年になる。私は小さい頃から手紙が大好きで、近所にしか友達がいないのを残念に思っていた。用事があるなら一走りもすれば足りるのであり、誰か手紙を書く相手はいないのかと、母をいつも困らせていた。と

ころが中一の三学期を終る頃、不意に転校という一大事があったのである。

手紙とは何とすばらしいものだろう、遠く離れた友達と心が通じ合えるとは。友達が悩んでいれば、その苦しみを半分にしようと、こちら心こめて書く。修学旅行があった時、お互い興奮しながら便せん五枚にわたる報告を書き、小さなお土産とともに地方の香りを届け合う。私は新しい中学校で二年間、転校生として過ごしたわけだが、そのために悔しく辛い思いをしたことが幾度もあった。そんな時、机に向かい、友達の心にペンを走らせる。友達はずっと私を理解してくれ、心のこもったアドバイスをしてくれた。

私は今まで五年間の手紙をずっとダンボール箱にとってある。箱を開けると過去の思い出が蘇り、手紙の一つ一つに何か感謝の気持ちさえ生まれてくるのだ。今でも七人の常連、そして、ときどき手紙をくれる人を含め、年間90通、ピークの年は130通を越える文通を続けている。

たしかの夏休みだったと思う。昔、ピアノを習っていた先生から暑中お見舞いの返事が届いた。その一節にこんなことが書かれてあった。「人間は生きている限り苦しいことがたくさんあります。熱中できる何か、自分を支える何かを持ちなさい。」と。

温い心のこもった友達の手紙、それが自分を支える大きな力だと、私は胸を張って言うことができる。

(1984年度、高3)

【注】

- (1) 米山・白井・高木「国語表現の学習指導」(『名古屋大学教育学部附属学校紀要』第30集, 1985, p.73)
- (2) 齊藤・高木「国語表現の学習指導」(『 』第31集, 1986, p.59)